



Title	懷徳堂と醫學また醫家
Author(s)	羽倉, 敬尙
Citation	懷徳. 1963, 34, p. 43-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90387
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷德堂と醫學また醫家

羽倉敬尚

近世の儒學及普に伴ひその一部門として醫學・物産・本草の如き後の醫學藥學が專攻せられて來た。しかしこれらの學は一通り或ひはヨリ以上に儒を修めて後に攻められるのであつて、例へば蘭醫小石元瑞が「儒骨醫皮」の語を用ひてをるが、儒學の素養根柢の上に醫が修められたのである。儒にして醫、即ち儒醫の語が汎稱せられたのも故あることである。

元來我國醫學の培養源である中國の醫書は勿論漢文で記され、又西力東漸後の西洋醫文獻も難解の蘭書解讀に至る迄、中國に於て漢譯せられ移入せられたのであるから漢學の識能がなければ醫學を修得し得ず、從つてこの儒と醫との二學の關係の密接さが知られる。茲にこの面の一例として懷德堂（また懷德書院とも、以下書院と略稱する）の師儒の二三代表人を取り上げ、これと醫學部門また醫家との交渉を述べる。尙ほこの機會に關係ある先賢及び故人の傳をも附記することをこゝわつておく。

懷德堂と醫學また醫家

一、三宅萬年

書院最初の學主、三宅萬年は諱は正名、號は萬年の外石庵とも稱へた。萬年は京都に生れ、弟觀瀾と共に、崎門の高弟淺見綱齋に學んだが、後陸王に入り、遂に師と見解を異にし絶交した（後年の中井竹山覺書等）。

萬年修學の經路かくの如くで、謂はば諸說併せ採るの風あり、時流に超越してをつて、香川太沖の如き、萬年の學を目して塾學ヌシガク間と呼び、その學風多岐時に難駁なりと迄そしられたのである。萬年は父祖の技を習ひ、謠曲を好くし、鼓をも善くした。

萬年が抑々この大阪に帷を下すに至つたのには、あるパトロンの盟友がある。それは讃岐琴平の商賈、木村平十郎（從來半十郎とせるは誤り、正徳五歿、六十九歳）及びその弟平藏である。

この木村は何商か知れないが、相當の有資家で、且

つ業間學を好み、俳諧を善くして寸石と號した。萬年も、俳名を泉石と云ひ作品もある。この寸石兄弟が壯年の萬年を琴平に聘して自らも受業し、且つ近郷子弟をも習はしめた。萬年その地にある事十五年で、その室、岡田氏は實に寸石の介に依つて娶つた。かくて寸石、大阪に出て安土町二丁目に業を営むに至り、萬年を伴ひ來つて、自らの寓居の中に開塾せしめた。これが「多松堂」で、この「多松堂」が後の書院の先容の姿をなした。書院の創學には、かくの如き、一商賈木村の萬年底護も一因子をなしてをるのである。この頃、寸石と石菴とに就いては、岡田利兵衛氏の示教を受けた。尙ほ商賈寸石の營業種目は知られないが、藥種商だつたらしく思はれる。

萬年は又書に秀でた。その筆蹟雄勁、中井蕉園評して、道風以後の書と云ひ、篠崎小竹文集にも激賞の文がある。萬年は晩年、熊膽の丸藥を製して返魂丹と稱し之を販賣、虚弱の一子、春樓將來の活計を圖つたので、醇朴にして財に拘るべからざる君子儒にして、商を営むとして、物議を招いた由であるが、要は萬年の博學で融通合理性の性狀を窺知せられる。

萬年はかく製藥を營んだが、醫を修め診療に當つたことは傳へられない。しかし彼れには「醫事傍觀」の一醫書の著録がある。この書は、序文末尾に、享保戊戌（三

年）冬十二月、平安萬年散人於東閣客中作と記され、巻尾に己亥孟夏の識語があるのに依つて、即ちその江戸下向の羈中の述作なることが知られる。

「醫事傍觀」一冊の書名は夙に「懷德堂考」（西村天囚著）中にも萬年の詩稿と共に、稀に傳はる萬年の著として名のみ舉げられてをるが、醫家ならざる萬年が、謂はゆる傍觀として、當時の醫學を評し、又、己れが醫家ならば、かかる態度で患者に臨むと云つた様な抱負を、儒家乃至は知識人として述べた一奇書である。私は偶然の機會に、此書を大阪市田邊の大田信三氏から借覽しこれを通讀するを得た。大田氏は天囚子が「考」（懷德堂考の略稱以下同）中に、此書の所藏者として、又他の資料諸書の借覽を得て名を舉げてをる故源之助（號芦隱）の弟である。

附記 芦隱子は大正二、卅七歳にて終り、墓は阿部野墓地にあり、標記及び碑背の撰文は天囚子で、中に「君人ト爲リ恬淡淳默好シデ遺文ヲ蒐集シ、先哲ノ事蹟ヲ考査シ、遍ク斷碑刻碣ヲ荒利廣邱ノ間ニ求メ、且ツ掇シ且ツ錄シ（書集七種）ヲ編ム」とあり「賦命^{ナシ}胡薄、稟性胡厚、其書具在、其人不朽」と銘してをる。

特に廢校後の懷德堂の諸資料並びに浪華醫家の文獻を集めた「醫事傍觀」は武田藥工の「杏雨書屋」の架藏中に

もある。但しこれには如何なる故か次の序文を缺いてをつた。序文は次の通

醫事傍觀序

程子曰ク「病ミテ床ニ臥シ之ヲ庸醫ニ付シ、之ヲ不慈不孝ニ比ス、親ニ事フル者、以テ醫ヲ知ラサルベカラズ」ト宜ナル哉是言ヤ、余嘗テ之ヲ説イテ曰ク、「謂ハユル醫トハ其人ヲ謂フナリ、其事ヲ謂フニハ非ルナリ、而レ凡事モ亦寓ス、何トナレバ即チ醫事ヲ辨セスンバ以テ醫人ヲ擇フコトナシ、且ツ醫無キノ地ニ方ルノ時、手ヲ束ネ口ヲ箴シ、以テ病モ差劇キ時、一ニ之ヲ天命ニ付シテ止ム者、寧ソ可ナリト謂ハンヤ」ト、又曰ク、「父ニ資リテ君ニ事フ、孝子ノ門ヨリ忠臣出ツ」ト、既ニ人ノ子ト言ヘバ、則チ夫レ人ノ臣タル者、隱然トシテ中ニ在リ、其ノ夫婦ニ於ケル、昆弟ニ於ケル、朋友ノ交リニ於ケルカ如ク、亦以テ推スベキナリ。而シテ身ハ親ノ枝ナリ、聖人ノ慎ムトコロ、疾其一ニ居ル、是ニ依テ之ヲ觀レバ、人トシテ以テ醫ヲ知ラサルヘカラサルナリ、亦甚シキカナ、夫レ士農工商各其職アリ、猶斯ニ承知セント欲スルガ如キモ但專攻スベカラザルノミ。況ンヤ醫家ニ在リテハ業トスルハ則チ人ノ病ヲ治シ、任スルハ人ノ生命ヲ寄スルナリ、其レ當ニ之ヲ如何トスベキヤ。世醫ノ古意ヲ失フヤ頗ル久シ、而シテ余、醫事ニ於テ略傳聞スルコトア

リ、故ニ今其ノ大意ヲ述ベ以テ之カ説ヲ爲ス、凡テ四通題シテ傍觀ト曰フ、庶幾クハ其ノ親朋同志者ト共ニ之ヲ講セント云フノミ、或ハ曰ク「業ニアラズシテ醫ヲ言フ、臆度懸斷恐ラクハ誤アルヲ免レザラン」ト余曰ク然レハ乃チ吾レノ此編ニ題スルトコロニ此名ヲ以テスルハ、亦將ニ彼ノ識者ニ俟ツコトアラントスルナリ、然リト雖、諺ニ云フ、「局ニ當ル者眼ナシ、傍觀ハ眼アリ」ト、勢則チ然ルヲ言フナリ、世ノ良工タル者、請フ亦之ヲ思ヘ

(原漢文、書寫者片隱子ノ句讀、送り假名ニ依ル)

本書は、半紙版卅六葉漢文敘述で、本文は、六診、六治、廿四擬、視病心法の四項に區分せられ、附録として藥石問答以下五項目に亘る問答牀より成る。

萬年は上述の通り諸學萬能であつて、醫學書も相當讀んだらしい。文中に見るも、中國最古の醫書、內經謂はゆる素問、靈樞を初め當時の醫家の研究書、傷寒論、金匱要略又本草書を精讀し、殊に當時の古方醫學の大家後藤艮山には頗る傾倒してをる。

艮山は江戸に生れ、名は達、號養庵、羅山林子に儒を受け、牧村壽に方書(靈方奇術)を學び、廿七歳京に出て、古方家の大宗、名古屋玄醫の門を叩いたが、贅薄きの故を以て見えられなかつたのに發憤して獨力、醫を修め奥を究め名を養達と改め、遂に一家の法を樹立し、門

下に香川修徳、山脇尚徳（東洋）の如き俊秀を出すに至つた立志傳中の醫家である。性著録を好まず而かもその醫説は、一氣留滯論（一氣は一の元氣）の如き傾聴に足るもの多く、又灸治を主張し、溫泉、熊膽、の利用をも説いた。艮山が「人ヲ解イテ之ヲ觀ルニ若クハナシ、而レ臣官ノ制スル處ハ得テ犯スベカラズ、己ム無クンバ則チ類「カワウソ」カ」と云うた言は、後に後の解臟に依る實證外科醫學の喫緊性を示唆してをる。

萬年この艮山説を多分に按配取捨し、例へば傍觀第一項六診（診斷法）の條、古醫法の四診即ち望色、聞聲、問證、切脉の外、他に艮山の按腹、候背の新法を稱揚し、又第二項六治に於ては、艮山の浴湯、餌食（食餌療法）に頗る賛意を表し、更に傍觀的な一家の見をも述べてをる。第四項、病を視る心法は、醫が診療に當る際の心構へととして、其の心を平らかにする、即ち冷靜なる氣持で當るべしと云うてをる。斯様な事を醫家ならざる者が述ぶるは、醫家に對して教ふるもので、越俎の感なきにしもあらずであるが、碩儒萬年の言としては聽容せられたのであらう。要するに傍觀の所論は、當時の謂はゆる頂門の一針であつて、此書が傳寫傳へられてをる事に依つても其の感がなされるのである。

要するに萬年は醫家ではなく、勿論、診斷治療には當

らなかつたが、醫事に就いて一通りの見識を有し、當時に於ける一醫學者であらう。

萬年及び後の書院賓師の五井蘭洲と相識の今西正立（しよりゆう）も儒にして醫を兼ねた。正立は蘭洲の父持軒の門、名は春芳號白埜、現阪急寶塚線「服部」の東、南郷の舊家この家は世々攝關家領（攝津春日社領）垂水牧目代で、後裔今に儼存、正立はこの家の四十二代に當り寶曆十一年七十九歳没、妻は城南平野七家の中の土橋正俊の女、享保四年、韓使來聘の節、入阪の雨森芳洲を自宅に迎へたことが「考」に見えてをる。

二、中井 竹 山

書院創學の際の中心人物である中井誠之（號、楚庵、石庵門）の中井氏は、誠之の後、その二子、竹山、履軒の名師儒を経て、竹山の二子、蕉園、碩果その養子桐園と殆んど一家相繼いで初めより終り迄を通じ教職に任じた。誠之は創學頭初、學校預り人として、教授の傍ら書院の經營事務に執掌し、學主萬年死後（萬年は職に在る六年、享保十五年死）學主に陞つた。

この中井家は誠之の曾祖養堅號竹庵（萬治三歿）以來の醫で、父玄端初め播州龍野脇坂侯に仕へ、後致仕して數子を携へ大阪に來つて醫業を張つた。誠之はその四男

である。

誠之の妻は播州の里正植村氏の女（竹山、履軒の母）で、その妹は名醫古林見宜（名正溫）の弟蒼梧の妻であり、蒼梧は分家し子橋庵（名泰成）孫君明（名尙柔、竹山門）に傳へ、この縁で古林家は永く書院内に寓居し、書院の校醫衛生顧問また世話方相談相手ともなつた。

竹山は等身の著録を貽した。その中には萬年の如き醫事衛生書はないが、交友頗る廣く随つて醫家との交渉も多い。

「考」には竹山の交游門人の條に、加藤竹里（景範、藥種商小川屋）以下數人を擧げ、別に片山北海の混沌詩社中の賴春水（名、惟完、山陽父）との親善を説いてをるが、是等に勝ぐる共劣らぬ盟友に、筑後柳河藩醫で大阪の藩邸藏屋敷詰であり、傍ら業を張つて神醫の稱を博し、その門また多士濟々であつた淡輪重弼（醫名元潛、號蔀山）がある。これは「考」の編述の頃、恐らく此家の資料が見出されなかつたのであらう。

重弼は竹山に長ずる一歳、その長女繡は竹山の長子曾弘（號蕉園）に嫁した。惜しくも繡は寛政五、十九歳にて早死し、曾弘又享和三、卅七歳で老に至らず、子も育せず、血脉も傳へなかつたが、この婚嫁の一事を見てもその絶交のさまが窺はれる。

淡輪重弼の祖は、和泉日根郡淡輪庄から出で、祖父重良（初代醫名元潛）大阪に出で醫を業とし、考重泰（同上二代）相繼ぎ、此時初めて大阪の柳河藩藏屋敷詰の藩醫となつた。重泰の養子が重弼で三代元潛を襲名し、字、子諧、若くして、儒醫を京の名醫、養壽院法印山脇東洋（良山門）に受け、のち京儒皆川淇園に學び業成つて大阪中ノ島常安橋の柳川藩邸に業を張り、大阪人の治病衛生向上の面にも令聞を貽し、また傍ら多くの門弟を教えた。その高足には近世關西蘭醫始祖の小石元俊、甲谷道庵（初山脇門、大和芝村藩醫、名完重）白島元章（エゾ松前の祠官にて醫）等がある。

重弼と竹山との交渉については、前記の縁組の外は、記録多く散佚して惜しくも詳しく知り得ないが、竹山の「貧陰集」には「蔀山淡輪醫伯ノ七十ヲ壽ス」の七絶二首がある。これは年齢から推すに、寛政十年に當り、二首共に句中に著鞭の二字を使つてをる、即ち重弼が一歳の長なることを謂つたのである。

文化元年、竹山捐館（七十五歳）の後、重弼は亡友の情誼諱れ難く、竹山の章服正坐の像を製して、これに竹山の子碩果に題させて自家に傳へた。その題辭は寛政十年正月、竹山六十九歳の時、隱退披露の宴を書院に開いた際、門人にして畫人である中井藍江に畫かせた竹山自

らの講坐像の上に題したもので、

皋皮ニ坐斷スルコト四十餘年（講坐の革坐蒲團ニ坐シ教育ニ從フコト茲ニ四十餘年）云々

の詩である。この講坐像はウシロ向きで、竹山の顔貌は知り得ないが、重弼の製せしめたのは、眞向キ正面で、大儒の冒し難き壯容躍如たるものあり、碩果はこの亡父の自詠を記し其の次に、

右題言一首ハ先子（父竹山）ノ自撰ニ係ル、今、蒔山丈人（重弼）ノ爲メニ敬録ス、中井曾縮

と識した。寔に盟友重弼の發意に依つて、初めて竹山の顔貌の眞を後昆に貽し得たと謂ひ得る。この像は故森繁夫氏が自著「含翠堂考」に初めて紹介した。

碩儒竹山と神醫蒔山との友誼傳ふるもの纔かに右に止まるも、而かもこの一斑を以て、その深交の程は窺はるべく、顧ふに竹山七十五歳の長壽も、或ひは盟友の名醫蒔山の監護宜しきを得た賜であらうか、蒔山は文化五年、八十歳の長壽を全うした。

竹山は性寛容友交頗る廣く、その醫家との交渉も蒔山一人のみに止らない、篠田氏（飯岡姓）義齋（名孝欽字は徳安、寛政元没年七十三）もその一人で、義齋の家も父祖以來の大坂街巷の醫家で、義齋に至つて儒を専らにしてをる。義齋の二女は姉靜子が頼春水に嫁ぎて梅廳夫

人と云ひ（山陽の母）妹は尾藤二洲に嫁し梅月と云うた。而して此兩人の月下氷人は實に竹山その人であつた。更に義齋の弟で嗣となつた孝鍾（號滄浪、通稱剛藏寛政八没年六十七）の女幀子は碩果に嫁した。

又、近時研究の強潮せられてきた、我國の實證醫學者として解剖に従事した中川元吾（名は誼、字は伯方、大阪中ノ島住のみで歿年等不明）も竹山門に出た。その他、これは醫ではないが、町人科學者で、奇書「夢の代」を著した大阪北濱兩替商舁屋の番頭、山片小右衛門號蟠桃（後述の蘭醫麻田剛立門）また北堀江の酒肆で博物本草學を修めた坪井屋吉右衛門事、木村ケンカ堂弘恭の如きとも交友で、殊に後者は詩文書畫にも長じ、雅人の來訪絶えず、家は恰かも文化人クラブの觀あり（酒屋營業で飲食の用立ては便宜）竹山及び弟履軒もそのメムバーの一員であり、かかる會集に依る而かも科學人の剛立、蟠桃等との交渉は、師儒竹山をして醫のみならず、更にその學殖の視野を廣くし、近代學への認識をも深うしたことであらう。

三、中井履軒

履軒は竹山の弟であるが、兄の廣く交り適くとして可ならざると云つた態の性情に比し、籠居して經書の訓詁

注釋に潜心する一見隱逸の風ある碩儒である。その勞著、七經逢原は、明治後、仁齋、徂徠等の碩儒の著錄と共に、經書注釋の一名著として、四書注釋全書中に採擇せられてをるのを見て知られる。

しかし履軒は固陋の書篋中のみの儒ではない。彼れが沈思凝考、經典の眞義を探究する間には、一面視野を時勢の趨向に轉じて、新しい時代を洞察し、自然科學への理解を示した。殊にその友人の豊後杵築生れの大阪の醫家（又、天文學者）麻田剛立（本姓綾部、大阪に出て改姓、名妥彰）の人體解剖の實況を記した「越俎弄筆」一冊を後世に貽した事は著功である。この事は、近年、元東大小川鼎三醫博の活眼に依つて初めて紹介せられた。「越俎弄筆」は、序文二枚、圖十枚（履軒畫）解説十枚からなる小冊であつて序文は次の通である。

臟脉ノ說ハ醫ノ攻ムルトコロ、而レモ、滅裂湮晦スルコト亦已ニ久シ、山東洋ノ臟志出デ（寶曆四年（一、七五四）閏二月七日、京醫山陽養壽院東洋刑屍（男）ヲ官ニ請ヒ受ケ自ラ主宰シ、京都西郊ニテ解剖シ、之ヲ寫生シテ四面ノ圖ヲ作り、之ガ解説トシテ臟志一篇ヲ識ス、コレ實ニ、我國ノ人體解剖ノ嚆矢ニテ、江戸小塚原ニ於ケル杉田玄白等ノ刑屍解剖ニ先ツ十七年）然ル後、九臟ノ象位殆ンド章明ス、唯其說尙ホ未ダ率

強ヲ免レズシテ圖ニ糊塗多シ、則チ其ノ章明ハ未ダシキモノアリ、且ツ脉絡ノ義ニ於テハ闕トシテ載セザルハ何ゾヤ、紅夷ノ圖ノ精細纖悉ナルニ比ブレバ、其ノ說未ダ明ラカナラズシテ窮詰スルコト難キヲ以テナリ、吾友人豊國麻子（豊國ハ豊後、麻子ハ麻田剛立）喜ンデ臟脉ノ說ヲ誦ス、嘗テ聞ク、人屍ヲ觀ルコト三度、諸獸ヲ驗スルコト數十百ナリト云ヒ、往々又其ノ門人ト扶摘指授シ、之ヲ諸獸ニ驗シテ符ヲ人ニ合ス、我レ乃チ旁ラニ在リテ膝ヲ抱イテ寓目シ又其ノ說ノ概ヲ得タリ、蓋シ麻子大イニ著述シ以テ其ノ蘊ヲ發カントシ研求休マズ、天之二年ヲ假サバ大成アランコト必セリ、吾レ乃チ我が智ノ能ク及ブトコロ、吾目ノ能ク觀ルトコロヲ錄シ、圖十ヲ作り、解説五章ヲ後ニ附ス
安永二年季春 履軒幽人自序（四十二歳）

以て其の内容が窺へる。小川博士は本書を説いて解體新書〔注、杉田玄白譯〕以前の我國解剖學として最も高い水準のものであり、肝臟、胆臟、總胆管、十二脂腸の關係を圖示した處の如きは、その儘今日の教材にも採用出来る。

等、本書の價值の大なることを極論してをるが、履軒がかかる新研究への干與、關心の深いことは殆んど驚異に屬すること、當時の解剖傍觀など現代の如く防臭設備

のなかつた一事から考へても餘程の熱心がなければ出来ないワザである。この「越俎弄筆」自筆孤本は東大醫學部に傳はり傳寫本（竹山門瀧榮「號松蔭」寫）は、大阪武田藥工研究所にもある。因みに剛立の墓は夕日ヶ丘、淨春寺にあり、文は竹山の長子蕉園の撰である。

履軒は他に「顯微鏡記」の一文をも撰し、この文は「履軒弊帚」續篇に收められ男、袖園雇筆の文稿が大阪府立圖書館にある。この文は、友人の科學者、服部天錫が特殊擴大鏡を嵌めることを創造した顯微鏡の構造を履軒自ら試見して説述したものである。天錫は、寛政二年浪華郷友錄に依り、當時西區江戸堀に住んだ商賈で油屋吉右衛門と稱し、名式雅、字永錫、屋を機雲堂と云ひ、木村ケンカ堂に擬して犬ケンカと稱したことのみは知られるが歿年次が知られない。

履軒元より醫ではないが、保壽攝生家であつて、嘗て「南極老人ノ圖ニ題ス」に人壽の四害を説き、一に食飲節を失ふ二に思慮度に過ぐ三に蛾眉性を伐る四に刀圭術を誤ることを擧げてをる。また「老婆心」の一文がある。これは砂糖の害を極論したものである。また履軒には「畫鱸^{ケイ}」一巻の著録がある。これは履軒獨自の學識を以て樹木（若干魚鳥を含む）を考證したものである。

履軒は醫ではなかつたが醫道を自ら躰現しカラダに附

した人と謂へる。彼れは兄以上の壽を保ち文化十四年、八十六歳で終つた。

結 語

書院の學は、畢竟藩地でない自由思想の強い商都大阪に於て、庶民を對象として起つた學校で、創學に際し、幕府當局の認許を受けて其の庇護に浴した關係上、その採用した朱子學を基盤としては教えたが、その學風は竹山が嘗て

吾ガ學ハ林ニ非ズ山崎ニ非ズ一家ノ宋學

と曰うた如く、從來の學派に拘泥することなく、一家の見を以て、自由無碍謂はば被教育者の各階層に相應ふ様な校風を以て臨んでをる。かくて此處に學んだ者の中には、有名の學者よりも、寧ろ多くの無名人實用人がある事が看取される。かくて此處で學んだ人が、その修得した學を基盤として、おのがじし好むところに進向した事も思はれ、それだけこの温床たる書院又その師儒の學識には、これを温醸し得るだけの諸學とのツナガリ視野の廣い合理的な物への見方があつたことが讀み取られる。

以上に述べた醫學乃至醫家との交渉はその一斑であつて、或ひは書院の一側面又その學の展開面をも窺ひ得るであらう。（日本醫史學會評議員）

附 載

一、履軒の風貌は從來「懷德堂考」及び「同先賢墨迹」更に「大阪市史」に載せられた同種の單衣端坐し机に向つて執筆の素描風のものがありこれは懷德堂記念會藏で外にこれの粉本下畫と思はるるもの（并河華翁贊記）が奈良縣天理圖書館にもあるが、近年長府人の雅友中川好古（號鯉淵）畫の半身像が発見された。これは享和三年春履軒七十二歳のものであり昭和十年十月、筆者鯉淵有縁の後の下關人福井正滿氏によつて出版の「招魂帖」中に收められてをる。この帖は鯉淵が面識を得た儒林諸家拾五名を寫したもので、その中には履軒の外、竹山及びその長子蕉園（名曾弘）の同じく半身像がある。竹山も眞向きで蕉園の風貌はここに初めて出た唯一のものである。この履軒像は昭和卅二年東京小學館發行的日本文化史大系第拾卷（江戸時代下）に懷德堂記念會藏の竹山うしろ向き像と共に同會藏と誤記して收められてをる。私はこの履軒像を朝日新聞（大阪版）昭和卅八年五月廿七日紙上に紹介しておいた。

二、書院創學の功者麓庵以後歴代大阪の儒林名家であつた中井家系出自については、この大阪中井家が播州龍野藩醫中井家から出たことは天囚博士の「考」にも祖先は前田玄以、黒田延水（先賢墨迹に如水とあり）

に歷仕せしが曾祖竹庵名は養堅如齋と號し官を捨てて醫となり藝の廣島に遊べり。祖父名は昌倫字は養仙醫業を繼ぎて大阪に居り後脇坂侯に仕へて信州飯田に行き侯の轉封せらるるに及びて亦從ひて龍野に移れり。父名は昌重字は玄端その業を世にし脇坂氏を娶りて五男二女を生めり。長は懷之（養元）次は信之（伯元）次は廣之（權藏）柳原氏を冒して家老たり。次は即ち麓庵（以下略）

とあるのみで曾祖以後は繼續知られるが名儒の家系としてはその以前まことに漠然としてをる。私は大阪中井故天生（昭和十八終）及び同妹終子（同卅終）にも面識あり同家々系類は一通り見たが略同様程度しか知られなかつた。近年東上後かねて聞いてをつた龍野中井家後裔東京齒科大學元教授中井武一郎博士を訪うた處、聊か遠祖等についての家傳を知るを得た。左にこれを紹介する。遠祖についてはあと回しとして龍野・大阪兩中井家の分派を述べる。

龍野中井系圖は實は去る大正震災で同家は全燒惜しくも本書を傳へない。ところがこれより先、大阪の中井天生が東上後、明治四十一年冬（天生一家は明治廿一年勸むる人あり東京湯島ニコライ教に入り大阪から移つた。その前、同十二年天生の外祖父並河華翁、同十四年父桐

園、同廿一年、華翁遺孤で嫁がず並河相續の間（ウル）菊女相ついで死し一族凋落、天生自身も無妻であつたからで後年大正九年、大阪に再び歸住したのである）これを寫しておいたので災後これを寫して贈つた寫しが傳つてをる。だから前に擧げた天囚子の所記は恐らくこれを天生が呈示しこれに依つて書かれたのであらうが若干補うべきものがある。即ち梵庵の曾祖父竹庵の父に方運（寛永六、八、廿一終）といふがある。年代から推して前田玄以（名基勝、德善院法印、慶長七卒）等に仕へた人かも知からぬ。次の竹庵は萬治三、十、十一歿前記の外、教雲君の諡號がある。大阪上本町誓願寺に葬る。即ち男養仙が始めて出坂であるから父竹庵は同時か後かに大阪に移り大阪で終つたと思はれる。養仙醫業を繼ぐとあるから竹庵も醫であつたことが知られる。

次の養仙（正徳元、八、三歿、諡好生）については傳がある。

好生君少クシテ才量アリ、始メテ攝ノ大阪ニ遊ビソノ業（醫）ヲ以テ稱セラレ寛文中、本府（大阪）副鎮領坂東陽公（中務少輔安政、晩に如水と號し元祿七卒年六十二、ニ筮（セイ）仕——新仕——シ秩二百五十石ヲ賜ヒ眷顧甚ダ渥シ、侯ニ從ヒテ其ノ封、信ノ飯田ニ往キ又播ノ龍野ノ移封ニ從ヒ老イテ益々壯ナリ、玄要

侯（安政ノ子、淡路守安照、享保七卒年六十五）ノ時ニ當リ直言ヲ以テ意ニ忤ウテ家居シ乃チ恭貞君（男玄端）ヲシテ致仕（退職）セシメ家ヲ挈ヘ（タツサヘ）テ再ビ大阪ニ游ビ因テ遂ニ居ヲ移ス

寛政諸家譜脇坂系譜に依ると、安政の龍野移封は寛文十二、五月でこれは養仙と年次適するが元和三の飯田の轉封は安政でなく父淡路守安元（承應二卒七十歳であらう。その父中務少輔安治は寛永三卒七十三歳であるが既に元和元致仕してをる。安治は秀吉からの臣、賤ヶ嶽七本鎗の一人）の代で伊豫大洲から移つたとなつてをる。また仕へた中井即ち元和三に飯田轉封に従つたのも常識的に考へ正徳元歿（年齢記ないが）の養仙ではあり得ない。即ち養仙の父の竹庵或ひは祖父方運（寛永六卒）の代かも知からぬ。脇坂安元以降の世臣即ち醫を以て仕へた藩醫の様である。

尙ほ好生養仙が寛文中、本府副鎮（後述の通城代の次職の加番職らし）東陽公安政に新仕といふ一事につき、傍證固めに脇坂家譜安政の條を見たがその記がない。念の爲め大阪市史（昭和三年刊）第一卷を見るに、大阪城代は元和五、八月内藤信正が初めて、好生傳の記述は年次の前後錯綜らしく、この副鎮は城代の次位の定番（じょうばん又城番とも）定員式の中には年次に該當人なく、

定番と同格或ひは上位の加番（四人定員）に寛永三、水谷伊勢守勝隆一名新任のみの名出で「勝隆任官のこと家譜に見ゆるも當時の同僚（同職他の三人のこと）の名を明らかにせず」の説明がなされ、年次降つた寛文時の在職名も出てをらぬ。またこの職中の第一位、山里加番（城内本丸山里廓が定位置か）は三四萬石の諸侯他は一、二萬石云々との追て書きもある。思ふに脇坂は祿五萬でこの山里加番であつたらうが、この加番職は或ひは一年位の短期差遣職城代の幫助職で家譜にも記されず、念の爲め繕いて見た「大武鑑」にも定番の人名のみで加番の名は出てをらない。従つて傳へられないのかと思ふ。

養仙の子は即ち楚庵の父玄端で享保五、七、十八歿（年齢ナシ）諡恭貞で傳に

恭貞君祿ヲ襲グ、既ニシテ食口益々衆ク家計支フル能ハズ、寶永三年五月致仕シ家ヲ舉ゲテ大阪ニ出デ醫ヲ業トス

とある。その以下殊にその四男楚庵については「懷德堂考」に譲つておくが、以上で見ると大阪中井家は竹庵、養仙以來の上述龍野藩醫家が養仙の男玄端に至つて致仕して大阪の醫家となつた家となる、玄端の長子養元老に至らず三男權藏廣之は柳原氏を嗣ぎ龍野藩老となり次男伯元信之が父玄端の弟玄意即ち叔父の養子となつた。玄

意は貞享三、玄要侯安照に新たに召されたとある。貞享三は兄玄端の致仕出坂の寶永三の廿年前であり兄弟同仕となる。そして嗣伯元は隱居睡翁と號し安永四十八歳の長壽を保つた。この後が以後連綿五世龍野藩醫として明治の常次郎に至つた。上出の當主武一郎博士はこの常次郎の養子で室が常次郎の女である。尙ほ別に玄端の季子（五男）即ち楚庵の弟、文之號常庵は別家し播の赤穂に醫を開いた。父玄端は晩に大阪からこの赤穂に來つて養老して終り同市春日町興福寺に葬られてをる。要するに玄端即ち楚庵の父は致仕して四男楚庵を携へ寶永三、大阪に移つた。龍野藩の臣籍は自分（玄端）の弟玄意からその養子とした（玄端の次男で楚庵の兄）伯元へ繼がれてをる。強いて云ふならヤハリ龍野が本家で大阪中井は分家と云うべきであらう。以上、稍複雑乍ら元龍野中井家系を採訪の儘記して失亡に備へる。

次には中井家遠祖であるが、これについては現在何ら所記を傳へず武一郎博士から承つた口碑であるがこれ又聞いた儘を紹介する。

それは遠祖は橘姓で楠氏、正成の弟の後の幼兒が河内に隠れ家臣中村・大井（オオイ）兩氏の庇護養育に依つて長じて中井氏を稱した、依て家紋は橘である。と、以上である。

實は私が、上記中井家系記録を採訪したのは武一郎氏の順天堂入院加療中で、その承認を得て先づルス宅を守られる一女堀田常子氏を訪ひ見せて貰つたのであり、後病院を見舞つた時には博士は手術後経過良好、不日退院シバラク轉地療養して歸宅の後、緩々寛談をと約された處、昭和卅八年三月二日夕、病況急變七十一歳で終られたのである。私が見舞つて敍上の口碑を承つたのはこの約一週間前で、唯々全癒を祈り更に會晤を期待してをうたが再び聞くを得ず遺憾禁ぜざると共に、この短い一言は全く博士の遺言の如くで頗る貴重、私には一種の靈告をも思はしめるのである。

かかる口碑特に家傳口碑の信憑度については現代は須らく、これが傍證を求めるべきである。元來家系は概ねその家の所傳がもとをなしてをり、その家からの提出申告に依る呈譜が纏められたものが多い様で、これを唯その家の所傳だけを鵜呑み決定するのは甚だ危険事で、これが適確完全を期するには信ずべき他家の記述との對比更に史實を裏づける當時の文書記録等を要する。殊に楠氏關係の所傳の如きこれの取捨は頗る慎重を要するものなること前人屢々既にこれを説いてをり尙更である。

私はこの口碑について萬一を期し差向き故藤田精一陸軍教授の力著「楠氏研究」や太平記をも一瞥した。楠八

臣、和田正遠、恩田滿一、湯淺定佛、八尾滿幸、宇佐美正高、安滿了願、志貴朝氏、神宮寺正師の名も見た。元より直ちにこれが傍證事などある筈なく要するに何ら所得はなかつた。

系圖の集大成書として信憑度高く又時代も室町初期、洞院公定編の「尊卑分脈」(古く「國史大系」所收で、近年天文廿一年卜部兼右寫、廣橋並相兼秀舊藏、のち龍野脇坂安元藏、現前田尊經閣傳藏本で校勘再版)の橘氏を見るに正成の父は從五上正遠、長子俊親、次男正成、參男和田七郎正氏とあるが、この父正遠に既に正康とする異説あり、有名な太平記所載の正成の弟正季もこれに無い。要するにかかる調査は至難の事である。

唯ここに輕微と片づけられればそれ迄だが一資料がある。それは臣、中村・大井二氏から連想される地名で「近畿電鐵」の大阪天王寺發、河内長野市行、終點一つ手前「瀧谷不動」の東五キロに「中村」の地名あり、又「南海高野線」の長野の次の次「千早口」の東、約三キロ、即ち徒歩千早を経て金剛山に至る途上に「大井」の地名があることである。現在、中村は南河内郡河南町の内、大井は河内長野市内である。

地名を以て氏とすることは古來の慣例であり、現に中村の西南約五キロの吉年(ヨドシ)を出自と稱える家は

歳)の

忠ハ倒日ヲ廻(メグ)ラシ義ハ清霜ヲ凌グ、楠公ノ元

(首)千載生ケルガ如シ(四言四句)

の自書が刻されてをる。觀心寺には檜尾山(寺の山號)

寄進記名中に

天明六丙午年夏六月

石燈籠壹基(壹對とあるべき處)油料金貳兩毎月廿

五日夜

向野村(現河内長野市向野町―市内長野町の北―)

辻野又太郎正勝(後裔現在なし)

楠正成公前ニ寄進

記載があるのみで、これで見ると、唯辻野が履軒に囁して作且つ書いて貰つたと想はるるに止まる(以上、中村・太井・向野の地名又その姓氏の家の存否及び觀心寺文獻については河内長野市會議員吉年晃氏の調査示教に依ることを附記し深厚の謝意を表する)

今河内長野市に本分數家が現存し、實はこの本家は私の舊縁邊で、觀心寺の文化二年建碑文(篠崎小竹撰文)にも名が見え嘗て家系をも見たが橘姓であつた。中村・太井の二地には今これを氏とする家はなく更に後記の燈籠寄進の向野村辻野家も絶えた由である。とに角私は、臨終近き故博士の遺言を、あながち捨て難いものと考へる。もとより故裔孫の片言を靈告視して信を措く様なことは嚴しい系圖史實として容れられないが、中村・太井二氏の名が、因るところと思はれる地名に存することは、一縷の考證資料となし得ると考へられ、從來は不明だつたが、今後せめて中井家の遠祖は楠氏の裔と傳ふるの一事を附記し傳へられるようお願いしたのである。尙ほこの一事は、或ひは故天生も聞いたかも知れぬが、一傳説事として聞き流し、従つてそれが天因博士の筆にも上らなかつたのかと思ふ。

河内觀心寺大楠公首塚前の天明六年六月建左右一對の燈籠にはこの後裔に擬してほしい中井履軒(當年五十五